

AICHI
PREFECTURAL
MUSEUM
OF
ART

MEMBERSHIP

愛知県美術館友の会・会報 第27号

空中回廊

この企画展はまじりっけなし！[ライオネル・ファイニンガー展]
／会員のひろば／愛知県美術館コレクションから[ピエール・ボナール]
／講座ダイジェスト[曾我蕭白]／友の会活動紹介



ピエール・ボナール 《にぎやかな風景》1913年頃

○この企画展はまじりっけなし！○

ライオネル・ファイニンガー展

2008年10月17日(金) から 12月23日(火・祝) まで開催

所蔵作品展でお馴染みの、黄色い光線が印象的な作品《夕暮れの海Ⅰ》。この作品を描いたのがファイニンガーであること、そしてファイニンガーがどんな画家か、みなさんご存知ですか？愛知県美術館が収蔵した1990年当時、この画家の絵を所蔵している公立美術館はありませんでした。コレクションの軸「20世紀の美術」から外せないと判断されリニューアルオープン準備期間に収蔵されたこの作品。今回の「ファイニンガー展」を訪れば《夕暮れの海Ⅰ》が描かれるまでの経緯と、その後の作品の流れを知ることができます。

みどころ

今回の目玉は「美術館にファイニンガーのみの作品が並んでいる、本邦初の展覧会」ということでしょう。「○○とその時代」のように、メイン作品と他の画家の作品を混ぜての紹介ではありませんから、どっぷりと、ファイニンガーだけの世界に浸ることができます。監修を依頼した



《ゲルメローダXIII》1936年 メトロポリタン美術館
The Metropolitan Museum of Art, George A. Hearn Fund,
1942. (42.158) Image © The Metropolitan Museum of Art.

ウルリヒ・ルックハルトというハンブルクのキュレーターのコネクションを利用することにより、約140点の作品が集まりました。50点の油彩画のみならず、素描からおもちゃ(!)まで、一挙に観ることができます。いつもカンディンスキーやクレーなど、当時の有名な画家との組み合わせで紹介されてきた画家。表現主義からキュビズムに変化し、独特の世界を創りあげたファイニンガーの作品を一度に観ることができるのは、この機会をおいてほかにありません。



《夕暮れの海Ⅰ》1927年 愛知県美術館

ライオネル・ファイニンガーとは？

ライオネル・ファイニンガーは1871年7月17日、ニューヨークに生まれました。ハンブルク、ベルリンで絵画を学んだあと1891年よりベルリンで挿絵画家、諷刺画家として活動を開始します。展覧会ではこの頃の作品、1906年の『シカゴ・サンデー・トリビューン』に掲載されたものを観ることができます。1907年頃から油彩画に取り組み1911年、キュビズムの作品に初めて接し、その影響を受けます。1919年よりワイマールのバウハウスで教鞭をとりました。ファイニンガーの、よく知られた教会建築や海辺の風景を主題にした様式は1920年代に確立されます。1924年、シャイヤーが組織した「青の4人」にカンディンスキーやクレーとともに参加しました。1937年、ニューヨークに戻り1956年、84年の生涯を閉じています。

実現するか、その眼で観てください！

みなさんに、ぜひ見比べていただきたいのが《緑

特集 所蔵作品管理サポート活動の足跡 〔お針子グループ編〕

今年4月の杉本健吉展では、「所蔵作品管理サポート部会」の活動に対し美術館から改めてお礼が述べられましたが、具体的には、これまでどのような活動をしてきたのでしょうか。会員の皆様にご理解をいただきサポートのご協力をお願いする為にも、その活動をご紹介しますこととなりました。

今回は、所蔵作品管理サポート部会の活動の中でも「お針子グループ」に焦点をあてました。美術館の長屋保存担当主任学芸員より、部会発足の経緯と個々の製作物がどのように使用されているかを紹介していただき、友の会本サポート部会担当の武藤理事より、活動現場からの声を寄せていただきました。



●部会発足の経緯 美術館 長屋学芸員より
平成16年の「どのようなサポートをお願いしようか」という学芸会議において、配布された最初の（案）には、この部会はありませんでした。保存担当の「できましたら…」という発言によって最後に加えられた活動案です。とはいえ担当だって今日のような部会のイメージがあったわけではなく、せいぜい2、3人でもお手伝い頂ける方々が居て下されば…という程度のつつましかな(?)提案だったのでした。

当初は「展示・収納備品製作サポート部会」という名称で、主にお針仕事を中心。でもそのことが幸いしました。というのはこういった静かな作業



収納用備品<立体用カバー> おもな所蔵品の立体作品にこのような絹の「パジャマ」を作ってみました。収納庫において作品に直接触れることになる備品の材料には、白い絹が使われています。これには古着の着物（主に長じゅばん）をほどいて洗ったものを使用しており、作業はその古着の解体から始まりました。



収納用備品ひら紐や鹿皮しかがわのやすくなり、はり絹程度でもおそらいます。

その他にも収納の難しい形状の、集たりしています。このように慈しまでられる存在でいられるものなので



収納用備品<絹の小布団1> これは作品用の「掛け布団」です。こういった場合、絹が選択される理由の一つは、長繊維であるため綿ほこりの出が少なくと言われています。鏡が箱の中でことごと動かないようにするために作って頂きました。これに使用された長じゅばん用着尺1反も、友の会の方からの寄付によるものです。



展示用備品などの下に山水展、熊製の備品が



収納用備品<絹の小布団2> 今度はいわゆる「枕」です。作品たちは「美術館の母」たちの暖かい手で作られた枕に身をゆだね、次の出番までゆっくり休憩です。ところで昨年、カナダからストラング博士という保存関係の研究者が来館され、収納庫を視察されたことがありました。その時、この小さな枕がとてもお気に召されたらしく、しきりに「Fine! (素晴らしい)」を連発されるので、記念に2つプレゼントさせて頂きました。愛知県美術館の友の会ブランドは、海外にまで進出です。



作業用備品「し」や「ヒ」行います。です。修復多いのです。ちよっとお室でも転倒の下の方持

の中の、ゆっくりとしたコミュニケーションがあったからこそ、急がず、でも限界を決めず、徐々に徐々にお願いする仕事の範囲を増やすことができたのです。昨年度、この部会は正式に「所蔵作品管理に関するサポート部会」と名称を改められました。

それにつけてもその過程において、誠に不思議だったことは、仕事の種類が増えるにつれ、部会員の方々も徐々に徐々に増えていかれたこと。まるで「打ち出の小槌」のようです。友の会には、なんと素晴らしい能力や経験をお持ちの方が多くおられることでしょう。杉本健吉の目録作りにつ



ながる、その「徐々に」増えていったお仕事については、またの機会がありましたらお話させていただきます。

●「鶴の恩返し」講座 友の会 武藤理事より

「鶴の恩返し」講座は、保存担当の長屋学芸員さんからサポート活動を続ける友の会会員に時折プレゼントされる勉強会です。

美術館内の温度と湿度の調整、展示室で活躍している自記温湿度計の役割、湿度と結露とカビの関係、虫干しの必要性、絹の優秀性、テンペラと画布、肌裏の役目などについて実物やボードで説明して下さったり、油絵や掛け軸の修復の現場を拝見して、専門の修復士の方から苦労話を伺ったりしています。

今まで知らなかった美術館のことや、気づかずにいた空気のことなど、毎回為になるお話を伺うことができ私たちこそ感謝しています。

第2、第4水曜日10時～16時（随時参加）友の会コーナーで和やかに楽しく活動しています。ぜひ皆さんも所蔵品管理サポート活動（書類関係のサポートもあります）に参加してください。

＜紐＞ 桐箱に使用されている真田紐は、やはり古くなると弱くなり切れます。柔らかい桐材や漆のものにはやの強度の紐が一番。こういった紐だけでも300本以上を作って頂いたことと思



その他<木村コレクションの風呂敷> 木村定三コレクションの工芸品などが包まれていた風呂敷には、木村さんが自ら墨書きされた名札が縫い付けられており、けしてそのまま水洗いをしていいようなものではありません。友の会のみなさんは一枚一枚形状を記録した上で、この名札部分を取り外し、洗浄してからまた復元するという仕事もして下さっています。

特別詠えの「寝具」を手作りして下さったものだけが、いつまでも美しく愛しよう。



その他<繕い物> 同じく寄贈された作品の包装は時として、それ自体が旧所蔵家の資料になり得ます。こういったものは作品ではないのですが意外と重要なものです。そういうもののほころびを縫ったり、繕ったり、時には裏打ちをしたり。長屋が「美術館の母」と敬愛する理由はこういった地道な作業を、気長に、にこやかにして下さる姿が、本当に尊いと感じるからです。

、木村定三コレクション名品展で鏡敷かれていた赤いマット。その他にも、谷守一展などでも、このサポート部会が使われていました。



＜おもし＞ 紙の作品の「しわのばし留め」は、館内で館内スタッフがこの時使用する「おもし」も友の会製工房でもこれらは手作りによるものですが、こんなに使い勝手の良いおもしは、目にかかれません。これらは時に展示防止のため、壺の底などで文字通り「縁打ち」を發揮しています。

その他<洗濯物> 取蔵庫の収納や展示作業に、美術館は意外と多くの「さらし」を使用します。ところでこれを洗濯機にそのまま放り込むとどういことが起こるでしょう。そう、洗い終わって乾燥したとたん、あなたはこんがらがって、ひとかたまりになった気の狂いそうなしろものを発見することでしょう。友の会のみなさんは洗う前にこのようにゆるくまとめて、それから洗浄して下さいます。そして洗い終わったものはこのとおり。これには日通やヤマトの美術梱包スタッフの方も感心しておられます。

○講座ダイジェスト○

友の会特別講座

円山応挙がなんぼのもんじゃ! — 曾我蕭白

6月8日、特別講座として同志社大学の狩野博幸先生をお招きし、曾我蕭白について講演していただきました。狩野先生は、京都国立博物館在籍中に伊藤若冲・曾我蕭白の展覧会を企画され、奇想の画家を世に広く紹介されました。

曾我蕭白(1730-1781)は京都の商家(紺屋)出身で、同じく商家出身の伊藤若冲(1716-1800)と比較すると面白い。蕭白は年少期に、紺屋の屋台骨を支える人々(歳の離れた兄、父、母)を次々と亡くしており、一生食うに困らず絵描きに専念できた若冲と違い、厳しい現実を生きた。



伊勢・播州地方に蕭白の作品が残っていることから、若い時代その地方を巡り歩き、絵を描いていたことがわかる。冷泉為人氏によると、伊勢や播州は木綿の産地であるところから、紺屋であった生家の縁を頼って画家としての生活を始めたのではないか。

京都に定住したのは43歳頃。46歳時には「平安人物志」(京都定住の有名人目録)の画家の項に円山応挙や若冲と共に名を連ねている。蕭白は歴史から消された画家とされているが、当時有名だったことがわかる。しかし、画家としての地位を確立した48歳の時に幼い長男に先立たれ、自身も52歳で亡くなっている。85歳まで生きた若冲とは異なるつらい人生だった。

このような境遇から、蕭白は世を恨んで描いた画家という捉え方をされているが、私はそうは思わない。絵を描くことで、むしろ救われていたのではないか。染物屋である紺屋には、色彩感覚や絵心が必要とされる。生家が紺屋であることが画家として生きていく糧となり、悲劇的な人生ではあったが、よこしまな道に入らず絵を

描いて生きていけたことは、ある意味幸運だっただろう。

代表作とされる《群仙図屏風》などから、エキセントリックと思われがちだが、蕭白の本来の姿を捉えるのにヒントとなる繊細な感覚で描かれた作品にも眼を向けたい。

元の将軍バヤンを描いた《伯顔図》は、非常に謹直な描き方をしている。バヤンは略奪をしなかったことで有名な将軍で、墨一色の濃淡による超絶的な技巧での細やかな描写には、将軍に対する蕭白の思いが表現されている。《波濤鷹鶴図屏風》は伝統的な鷲鷹図でありながら、鷹に追われる鶴の表情を丹念に描いており、殺戮される側に優しい眼差しを向けている。



《伯顔図》35歳頃

一方で、釣果がないとふてくされる《太公望図》の太公望のように、常識的な規範をひっくり返す作品もある。《虎溪三笑図》などでは、主題となるべき人物が山水画の中でとても小さく描かれている。



《太公望図》40代半ば

何故、蕭白はこういう絵を描いたのだろうか。明末清初に興った先鋭的な思想の影響を受けた「狂」という思想が当時の京で支配的だった。「狂」=個性を持つことを重要とする土壌が18世紀後半の京都文化圏にあったから、蕭白は画題として捉われているものにひねりを与えた作品を描き、その作風を支持し受け入れる人々がいたのだろう。(中塚)

○愛知県美術館コレクションから一深く知ると、もっとみえてくる○

ピエール・ボナール

戸外で戯れるひとや動物。穏やかな陽光を浴びて広がる田園風景。画面中央には、木々、丘、川、家々などが遠く霞んで見えます。のどかなピクニックの場面を描写しているようです。この作品で目を惹かれるのは、なによりも色彩の多さとそのあざやかさでしょう。樹木の葉や影にも、ピンクや青、紫など多くの色彩が盛り込まれており、この作品に先だつ《子供と猫》1906年頃（愛知県美術館蔵）でも、白い服や皿には半透明の様々な色彩が重ねられています。

パリ近郊に生まれたピエール・ボナール（1867-1947）が1913年に描いた《にぎやかな風景》は、光を湛えた色彩に満ちています。1909年に南フランスのサン＝トロペを訪れた際、地中海に面した光あふれる彼の地の風景に感動したボナールは、以後色彩のとりことなり、色彩表現の豊かさによって、後には色彩の魔術師との異名をとるほどでした。アンティミスト（親密派）として知られたボナールは、身近なひとや風景を多く描きました。この作品を制作した前年にボナールは、パリから一時間ほど離れたセーヌ河畔のヴェルノンに別荘を購入しており、そこの風景が舞台と見られています。前景右手には妻のマルトと愛犬ユビュが描かれ、左手では身を横たえた女や子どもが犬やロバと戯れています。ひとと動物が戯れるこうした牧歌的な風景には、ボナールがギリシア古代の理想郷アルカディアに抱いていた憧憬が反映されていると考えられ、神話上の人物は登場しないものの、現実のヴェルノンの風景に古典的な風景を融合させたものといえます。

ヴェルノンのセーヌ河畔対岸のジヴェルニーには、クロード・モネ（1840-1926）が住んでおり、モネとは制作の上で互いに触発しあい、生涯にわたる親交をもちました。晩年のモネの睡蓮の作品では、形態は色彩にうもれ、鑑賞者は画面縦横に視線をめぐるせて見ることを求められます。こうした色彩や空間表現はボナールにも影響を与えたとみられます。



《子供と猫》1906年頃

《にぎやかな風景》では、前景左手の陽光を受けた低いレンガの壁は、近景を強調し、そこから視線を、空気遠近法によって徐々に彩度を減じながら表現されている遠景に向かわせます。また、前景右手のマルトと犬がくつろぐ日陰は、中景の青や紫色で表現された大きな木々と呼応して、この作品に構築性を生み出しています。この日陰は、鑑賞者が立っている画面手前の空間に存在すると想定される木が作り出したもので、さらにこの作品の画面にいつそうの広がりや奥行きを感じさせてくれます。（主任学芸員 藤島美菜）

※ご紹介した所蔵作品《にぎやかな風景》を、本会報表紙に掲載しました。

■学芸員の横顔

藤島美菜（ふじしま・みな）

愛知県美術館主任学芸員

愛知県美術館開館翌年より、主に教育普及事業に携わる。学生時代からの専門はファン・ゴッホだが、05年に開催された展覧会で、間近に作品に接する機会に恵まれあらためて魅了された。

好きなことのひとつは猫と戯れること。





AICHI
PREFECTURAL
MUSEUM
OF
ART

MEMBERSHIP

■理事会から

■通常総会、6月8日(日)に開催

08年度通常総会が6月8日(日)15時30分から芸文センター12階アートスペースAで行われました。出席者は委任状提出者を含め185名で、議案は原案通り、承認されました。

なお、総会に先立ち、狩野博幸同志社大学教授の特別講演「円山応挙がなんぼのもんじゃ！ー曾我蕭白」を聴きました。

■会員拡大にご協力を！

7月末にお送りしました「タイムスケープ」展の事業案内でも触れましたが、改めて会員拡大へのご協力をお願いします。今年度4月から8月末までに手続きを行った継続会員、新規会員は合計212名です。06年度、07年度の同期間はそれぞれ231名、264名で、今年度は大幅に出遅れています。原因はいろいろあるでしょうが、友の会が円滑な事業活動を行っていくためには一定数の会員確保が不可欠です。繰り返しになりますが、入会の呼び掛けをよろしくお願い申し上げます。

友の会会長 太田幸一

■友の会活動紹介

「杉本健吉展」
4月 特別鑑賞会(昼・夜)
5月 他館鑑賞会(三重県美術館) ☆
5月 講座 ロココ美術:ヴァトーとブーシェの絵画(栗田氏) ☆
「誌上のユートピア」展
6月 総会 ☆
6月 講座 曾我蕭白(狩野氏) ★
6月 特別鑑賞会(昼・夜)
6月 講座 ロココ美術:シャルダンとフラゴナールの絵画(栗田氏)
「タイムスケープ」展
8月 特別鑑賞会(昼・夜)
9月 ナイトカフェ(2回) ☆

定例活動
美術館モニター のべ2回
所蔵作品管理 のべ12回 ★
杉本健吉 平家物語の絵と掲載誌の照合
おもしろ・座布団・ピロッドクッション製作
さらし・手袋の洗濯
収蔵作品フォルダー・カードの作成
発送 のべ4回
受付 のべ12回
ナイトカフェサポート のべ2回
会報発行 第27号発行
ホームページ 随時更新
★中面で紹介 ☆裏面で紹介



◎講座◎ ……………→

栗田氏によるロココ美術に関する講座が2回開催され、西洋の美術が日本芸術に与えた影響と、近代の日本人洋画家たちが日本の伝統美術に立ち返ったことを興味深く説明していただきました。



◀……………◎他館鑑賞会◎

今回は三重県美術館「金刀比羅宮書院の美」展へ。応挙の障壁画や初公開の《飛燕図断片》、若冲の壁面全体に四季の花が描かれた《花丸図》等々。書院は襖絵まで配置通りに再現され、見事な展覧会でした。



◀……………◎ナイトカフェ◎

今年で4年目となり、友の会の「夏の恒例行事」になりつつあるナイトカフェ。音楽を聴きながらグラスを傾ける「オトナの夜」の雰囲気好評で、多くの方の参加がありました。

…………… これからの企画展のご案内 ……………

ライオネル・ファイニンガー展

10月17日(金) → 12月23日(火・祝)

アンドリュー・ワイエス —創造への道程

2009年1月4日(日) → 3月8日(日)

友の会入会のご案内

友の会の詳しい活動内容を知りたい方、入会をご希望の方は、下記までお問合せ下さい。

- 10階愛知県美術館受付
- 友の会事務局(火・木・金・土 10:00-16:00)
052-971-5511(代) 内線347
tomonokai@aac.pref.aichi.jp

編 集 後 記 この「空中回廊」は、会員のための「機関誌」であると同時に、会の活動を会員以外の方々にも宣伝する「広報誌」でもあります。これら両方の性質を兼ね備えた内容にするため、毎号、工夫しながら編集しています。(森)

□編集 水野 愛子/平松 章子/森 健次/中田 賢
折戸 祥子/中塚 千佳/松下 智子
□協力 愛知県美術館企画業務課
□発行 2008年9月
愛知県美術館友の会
〒461-8525 名古屋市中区東桜一丁目13-2
愛知芸術文化センター内
TEL: 052-971-5511(代)内線347
FAX: 052-971-5617
E-mail: tomonokai@aac.pref.aichi.jp
美術館HP: http://www-art.aac.pref.aichi.jp